

剣道の国際化

The Internationalization of Kendo

1 K03B139-7

中島広治

指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 小野沢弘史 先生

1. 本研究の動機

私は3歳の頃から剣道を始め中学校、高校、大学と剣道部に所属し、現在まで続けてきた。私は剣道を通して様々な人たちと出会い、交流を持つことが出来た。剣道では年齢や性別、国籍関係なく交流を深めることが出来る。大学の剣道部に入ってからには特に多くの外国人剣士と稽古をし、交流を持つ機会が増えた。その度に剣道が国際化されてきたことを感じた。

また、国際剣道連盟（International Kendo Federation 以下、「FIK」と略す）が結成されてから36年を迎え、世界剣道選手権大会（World・Kendo・Championship 以下、「WKC」と略す）も今年で13回を数えた。第1回大会と比べると参加人数・団体も大幅に増えた。剣道の国際化という観点から見れば、喜ばしいことである。しかし、国際化されてきたと言っても、オリンピック種目と比べると世界での認知度はまだまだ低い。剣道を国際化していく中に、数多くの問題が存在していることも確かである。指導者不足問題やオリンピック参加問題、最近では韓国剣道の台頭など国際化を考える上で避けては通れない問題が山積みである。日本国内においても、本来の理念から離れ試合結果を重要視される傾向があり「当てっこ剣道」「叩き合い剣道」と非難される声も少なくない。

私は剣道を世界の人たちに知ってもらいたいと考えている。剣道は「人間形成の道」と理念にあるよう、勝敗以上に大切なものがある。私はそのような剣道の本質を外国人剣士に伝えていくべきだと考えている。

このような状況において、剣道は如何に国際化を果たせばいいのだろうか。現在の剣道について調べ、知ることで、問題を明らかにし、解決策を導く。そして、剣道にとって真の国際化とは何なのか考察していきたい。

2. 本研究の目的

- ・ 剣道の成り立ちから歴史を調べ、どのように海外に普及されていったのかを考察する。
- ・ 現在の海外普及における問題を明らかにし、解

決策を考察する。

- ・ 以上を踏まえ、今後より一層の国際化を図るための方法を提言する。

3. 本研究の方法

剣道に関する文献の購読による文献研究である。情報が不足しているところはインターネット検索により情報収集をし補足する。

4. 本研究の概要

1章では、剣道がどのように成り立ち、海外に発展してきたのかを述べた。古くは、10世紀に起源を持つ剣道が現代では竹刀競技と姿を変え、多くの国々で剣道は行われている。FIKには44カ国・地域が加盟されており、剣道が国際的にも浸透されていることが分かる。また、FIKが創設されてからの30数年間の全剣連は様々な取り組みを行い、剣道の国際化に貢献してきたことを述べる。

2章では、現在の海外事情や剣道普及上の問題について考察した。剣道の国際化を考えた場合、WKCの存在は欠かせない。3年に一度のWKCは今年で13回を数えた。大会は回を重ねる毎に盛大になり、非常に喜ばしいことである。しかし、その反面国際化には様々な問題が伴ってくる。より一層の国際化を図るためにも、問題解決は必須となってくることを述べる。

3章では、国際化への提言として3節に亘って論じた。2章で述べた問題を解決することは勿論、日本は剣道の宗主国として行わなければいけないことが多々ある。国際化を図る上でも、剣道の本質を決して疎かにしてはいけない。試合に勝つことだけを求めるならば、今すぐにでもオリンピック種目へ参加の意思表示をすべきである。その方が剣道是世界中の人々に認知され、国際化ということに関すれば良いことであろう。しかし、それは真の国際化とは言えない。そのためにも、理念の簡略化や規則の改正が必要となってくることを述べる。

結章では、国際化していく上での問題点や解決策を確認し、真の国際化について述べる。真の国際化とは、勝負にこだわるだけではなく、剣道の本質を理解し、世界に広めていくことである。